

---

# 笑い日和。

大野さいころ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

笑い日和。

### 【NZコード】

N1856BA

### 【作者名】

大野さいじろ

### 【あらすじ】

剣も魔法もバトルもないが、幼馴染あり駄妹ありハーレムありの学園コメディ。力を抜いて読んでいただきたいです。たまにショートストーリーも投稿します。

投稿は不定期です。

## #1 こつもの風景（前書き）

はじめまして。大野さーーんと申します。  
到着地点を見つけないまま出発してしまったので道に迷うかも知れ  
ませんが、  
どうか温かい目で見守っていただければ嬉しく思います。

## #1 いつもの風景。

気がつくと見たこともない場所にいた。

……なんてことはまったくなかつた。

ここは2・B、つまり俺 大藤功<sup>こう</sup>がつい先日、四月の頭からいるクラス。

そういえば授業中だつたつけ？

まあ少しうとうとしてしまうのはおそらく学生なら誰しも経験があることだし、特に気にしないで教科書とノートの確認をしようとしたところであることに気がついた。

静かすぎるのだ。

いや、授業風景としてはこれ以上ないくらい正しい状況だけど。このクラスに限つては静かすぎるることは異常なのだ。

普段はあまり真面目な生徒がいないのか「onso」話したり「onso」何かしている音がするのがこのクラス。

授業なんて真面目に受けるのは真面目な委員長とその他少数だ。周りにクラスメイトがいるから寝てる間に教室移動があつたわけでも、皆が急に真面目になつたわけでももちろんないだろう。

俺が一人疑問に思つていると、後ろから背中をシャーペンで小突かれた。

伊藤恵<sup>めぐみ</sup>。 クラスマイトであり、俺の親友でもある女子。

恵とは去年知り合い、どうしてだつたかわからないが意氣投合して

仲良くなり現在にいたる。

現在席は俺の後ろで、授業中もよく今みたいに背中を小突かれるの  
でいつもなら特に驚いたり声を上げたりはしない。

そう、こつむなじである。

「痛いわー！」

授業中とこいつことを忘れて反射的に振り向きながら恵に怒鳴った。  
いつもなら恵はしまって小突いてくるのに今日は思いつきつ出来る  
ようだ。

背中にチクつとした痛みがまだ残ってる。しかもなんか一か所じゃ  
なく全般的にチクチクしてるんだけど…  
とこいつか、背中に刺さつたつてことか…

「ワイヤーシャツ貫通してるじゃねーか！－恵、なんで今日は恵に

しまつてないんだよ、と俺が続けようとしたら恵に

「（前ー前ー）」

ヒジHスチャー付きロゴばくで伝えてきた。

なんだろう？と思ひ、その仕草が馬鹿みたいだなーと場違いなこと  
を考えながら前を向くと

「モンスターがいた」

モンスターがいた。なぜか青筋をたててるし。  
後ろで恵が「思ったこと口に出しからつてるし……」とか言つてるが  
何の事だかわからない。

このモンスターは分類では人間で、国語教師の通称『体育』。  
文系の教師のくせに筋骨隆々で見た目は完全に体育会系。  
ちなみに中身も体育会系。

怒らせるとかなり怖いと評判の先生だ。  
ちなみに顔も怖い。

ここまで考えて めちゃくちゃ失礼なことを やつと理解した。  
このクラスが異様に静かで、恵が俺に何を伝えたかったのかを。  
そこまでわかつて嫌な汗がだらだら出てきた…。

そしてモンスターが動きを見せようとした時、

「殺さないで下さこーーー！」

おもいっきり叫んだ。命がかかっているんだ。恥がどひの「ひの言  
つてられない。

しかし後ろのほうで笑つてゐやつはやんとあとで制裁しよ。俺が生きていればだが…

「誰が殺すか！お前は俺をなんだと想つてゐるんだ！」

「えつと…。やさしい国語教師だと想つています」

「セツモンスターって書いてあります。よくそんなことが言へるな

…」

「心を読まれていた！？」

「口に出して言つてたわ！…まあいい。何か言い訳とかはあるか？一応あるなら聞いてやるわ。」「

「なぜ体育の教師にならなかつたんですか？」

「余計な御世話だ！廊下に立つてる…」

笑い声が聞こえる中、すうすうと廊下に出ていく俺。

廊下に立つてゐだけにどんな意味があるのかを誰かに聞きたかつたが、そんな仲間は授業中の廊下には誰もいなかつた。

ただ立つてゐるだけの、暇な間少し考える。

俺が通つてゐるこの学園は『私立国際学園高等部』。

国際とつくだけあって、一年生のクラスには毎年五月の中頃から留学生が来る。

どのクラスに来るのかはわからないが、面白いやつだとうれしい。ちなみにクラスは2・B。A～Eまでクラスがあり、一クラス40人程度の普通規模の学園だ。

また、すぐ近くに『私立国際学園中等部』があり、俺は一昨年までそこに通っていた。

ちなみに中学には現在俺の妹が通っている。

きっと再来年には妹もこの高校に上がってくるだろ？

高等部には受験なしで来れるありがたいシステムがあつたので、中学からの顔見知りもかなり多い。

もちろん外部から受験してくる生徒もいる。そういう生徒はやはり、留学制度などに興味があるのだろうか。

ちなみに俺は留学なんぞに興味はない。ここに来たのも受験なしという甘美な響きに誘われたからだ。

しかしそんな俺でも今ではこの学園をかなり気に入ってる。

というのも、不良がいないからだ。

不真面目な生徒はいるが、不良はいない。

ちなみに今住んでるこの町自体治安がかなり良い。

そんな環境を俺はかなり気に入っている。

荒波立てず、平穏でそれなりに楽しい生活ができる今を大切にしたいと思つてゐる。

これからも仲の良い友達と、楽しい時間を過ごしたい。

キーンコーンカーンコーン…

チャイムが学校中に鳴り響く。

授業が終わり、廊下にもいろいろなクラスの活動音が聞こえてくる。俺はさつそくいつものメンバーに混ざるために、教室に入ろうとしたが

またもやモンスターに出くわした。

よく考えれば当然だ。

モンスターに追い出され、教卓側のドアから入ろうとすればモンス

ターに会つのは必然だつた。

しかし、さつきまで悦に入つて自分の考えに浸つていたのですつかり忘れていたのだ。

「大藤、これから一緒に昼休みを過いJやうか。反省文ならおJひつてやるから」

「ありがとうございます。けど遠慮し」

「遠慮なんかするな。」

「いえ、遠慮」

「するな」

「はJ…」

強制だつた。笑顔が不気味すぎて怖かつた。

こつして俺は昼休みを失つてまでモンスターと過いJすことになつてしまつた。

教室からニヤニヤと見てくる悪友らを恨めしく思いながら、反省文を食べに行くのだった。

## 「肉じゃが」（前書き）

本編とはまったく関係ないです。

あらすじにショートストーリーもあり、と書きましたがこれがそうです。

以後も今回と同じように、サブタイトルに関連する話をショートストーリーとして

投稿するつもりです。

ちなみになぜ肉じゃがかと言いますと、作者が実際に知人と肉じゃがについて

話していたからです。毎回ショートストーリーのサブタイトルはこんな感じで

決まりますので、深い意味などはないのであしからず。

何度もいますが、本編とはまったく関係ありません。

## 「肉じゃが」

功「恵よ。肉じゃがの『じやが』って何か知つてゐるか?」

恵「じゃがいもの」とでしょ?」

功「そりだ」

恵「なんかす」「こ偉い!」しゃべるね?」

功「意味はまったくないがな」

恵「じやあやめゆつよ…」

功「あれ、恵には不評だったか?」

恵「うん、なんかイリツとしきやつた」

功「そ、そつか…。笑顔がなんか怖いんだが…」

恵「そんなことないよ。っていうか、すでに誰かに試したの?」

功「ああ、美香にな。あいつはす」「喜んでくれたんだけどなー」

恵「あー美香ひやんにか。なるほどねー」

功「なにがなるほどなんだ?」

恵「美香ひやん」「だから、功くんのやる」となす」となんで

も嬉しいんだよ

功「やさがにそれはないと思ひださない。さじょく考へたり喜びらつてのも確かにおかしいな」

恵「でしょ？まあそれはいとしへー」

功「うん？」

恵「結局なんだつたのかなーと思ひて」

功「？？」

恵「そんな本氣でわからなこつて顔されても困るんだださない」

功「ああーなんであんな偉そつとしていたのかつて」とか？「..」

恵「違つよー肉じゃがの話ー。」

功「ああ…そんな話もあつたな」

恵「なんでそんな昔の」とのよひ「..」

功「いやーわつきの恵の顔が般若みたい」

恵「二二二」

功「なんでこことはなくただ俺がど忘れただけでした！」みんなせい

！」

恵「もう。で、肉じゃがの話は結局なんだつたの？」

功「あーうん。今日食べたいなあと思つただけなんだけど」

恵「それだけ！？」

功「恵よ。肉じゃがが食べたいぞ」

恵「もうここまでのキャラは…」

功「ふふふ。ふははははははは…」

恵「…」

功「クレープはいかがですか、姫様」

恵「態度変わりすぎだよーそんな怯えなくとも…」

功「冗談だよ。すいません、イチゴクリーム味のクレープ一つください」

恵「いいのー？」

功「今日だけな」

恵「ありがとー！」

店員A「やつとこきましたね…」

店員B「ええ。クレープ屋の前で肉じゃがの話を始めた時はびっくりしたわ…」

店員A「しまじにはコントみたいこと始めちゃったしね…」

店員B「けどいつも仲よさやつなカップルだったわね…」

店員A「羨ましいわ…」

店員B「ホントにね…」

店員A&B「はあ…」

Jの曰、功と恵の何気ないやり取りで一人のクレープ屋店員が憂鬱になされたのだった。

## 「肉じゃが」（後書き）

結局肉じゃが関係なかつたとこいつオチでした。  
もはやサブタイトルの意味がない気もしますが、あまり気にしない  
でください。

## 「サンタクロース」（前書き）

本編がまだ進んでないのでキャラが一人しか使えないという不便極まりない状況です。

## 「サンタクロース」

功「サンタって無駄な労力を使ってると思わないか?」

恵「唐突に話しあしたねー」

功「まあ付き合つてくれよ」

恵「いこよー。で、一体サンタのどのくんが無駄だと思つの?」

功「まず服装かな。煙突よじ登つたりするにはあのもじゅうした服はよくないだろ」

恵「うーん確かに。けど動きやすい服装にした場合、煙突よじ登つたりしてるとこ見られたらそれはただの変質者に見えないかな?」

功「そうだな。けどその問題は簡単に解決できる」

恵「そななの?結構難しい問題に思えるけど」

功「サンタって子供に欲しいものを的確に『えるだろ?つまり、それぞれの住所を特定できるすべを持つてることになる。だから郵送すればいいんだよ!そしたら誰にも姿は見られない!』

恵「なんでそんなに興奮してるの?」

功「むしろ現金書留でいいよ!現金なら自由度が高いし、万が一欲しいものが直前に代わっても対応できる!」

恵「それは夢がなさすぎるよーー。」

功「しかもあいづはトナカイがいなければただのオッサンだしな！飛んでいるのはトナカイであつてあいづはそりに座つてるだけだから！感謝するよトナカイ！」

恵「だからどうしたのー？サンタに恨みでもあるのー？」

功「しかしながらほど。ここまで考えてわかつたけどあえて動きづらい服装をし、現金ではなく物を送り、トナカイを操り移動するのはすべて演出だったのか。まったく、サンタも中々粋なオヤジだな！」

恵「もうつこていけないよー。」

## #2 こつもの風景 2（前書き）

閲覧じゅうもありがとうございます。

何話か書きためてはいるんですが、中々作品の中の一話が終わらなくて困っています。予定ではこの回で一日が終わるはずだったんですけど…。

楽しかっただければ嬉しいです。

## #2 いつもの風景 2

反省文も無事終わり、午後の授業も終わった放課後。何をするでもなく、帰るわけでもなく、何となく集まっている3人の影。

一人は俺、大藤功だ。

一人はこの中唯一の女子で親友の、伊藤恵。後ろの席で二コ二コして椅子を傾けて遊んでいる。

どうでもいいけどかなりあぶなっかしい。そして楽しいのかそれ？そして最後の一人、黒川悟は馬鹿代表だ。

「黒川悟は馬鹿」

「急に罵倒すんのやめてくれよーー？」

「黒川悟はオタク」

「否定はしないけど改めて言わるとムカつくーー！」

「黒川悟はブサイク」

「女子に言わるとマジで傷つくよーーか伊藤も功に乗るなよーー！」

「黒川悟は」

「もついいでしょーー？そんなに俺の心を傷つけて楽しいーー！？」

「全然？」

「じゃあやめてよーなんで無駄にそんなことあんだよー?」

「『騒だから』」

「僕たちホントに友達なのかな…?」

「「…」」

「黙らなーでよー…まつたぐ、功と伊藤がそろいつ手に負えないよ。前だつて…」

悟は愚痴をこぼすよ。そもそも何か言い始めた。  
こんなときの悟は中々戻ってこない。さすがにやりすぎたかな?  
どうにも恵とこのと悪ノリしてしまつ傾向があるなーと皿分析していると、

「皿はお疲れさまだつたねえ~」

と恵に『氣の抜けるような声』で話しかけられた。

「まつたぐだ。それにしてもちつとも助けてくれなかつたな?」

少し責めるような眼をして言つてみる。

「だつて功くんつてば全然起きないんだもん」

全然気にせず、そしてなぜか若干悲しそうな顔で言つてくる。  
とこつか起ここやつとしてくれてたのか…。悪いことしたなあ。

「そつか。『めんな?お詫びに帰りになんか奢つてやるよ』

「ホントにー? ジャあじゃあクレープとアイスとハンバーガーと」「どんどん出てくる食べ物の名前。恵は小柄だがよく食べるのだ。つーかその小さい体のビニにそんなに入るんだよ、と疑問に思われるを得ない。

「ポテトにジャコースでしょ? あとば」

「太るぞ?」

恵がさらに何か言おうとしたといいで、女子に効果抜群な言葉を浴びせる。

恵はよく食べるが、別に食べても太らないわけではないのだ。

「う、…」

言葉に詰まる恵。そして追い討ちをかける俺。

「だるまみたいになるぞ? セツカくかわいいのに」

「う、…え?」

「え?」

「あ、いや…って「とかだるまつてひどくない! ?」

「あ、ああ。なりたくなかったらどれか一個にしてけつて」

恵の何かよくわからない勢いに若干押されつつも、自分の財布のた

めに提案する。

「うへ、わかつたよ。じゃあクレープ」

「りょーかい」

「3個ね」

「結局ー!？」

3個も食べるのー!?

予定外の出費が…。今月は結構金使う予定あるのに大丈夫かな…。  
まあもう決まっちゃったので切り替えよつー。  
あつとビックでこの分の金が戻ってくると信じてー!

と、およそ現実的でない期待を抱いてると

「早くこーーよー。」

と急かされる。

食べ物が絡むと恵は子供っぽくなるなーと苦笑してると手を引っ張  
られた。

「功くん、おいでいくよ?」

「おいでいく気ないじやん!」

めつちや力強いよー?簡単に引きずられてもよー?。

「い・い・か・らー」

「わかつたから引つ張んなつてー。」

自らも足を進めると、まだぼそぼそと向か言ってる悟が田に入った。  
まさかあれからずつと?なんかちょっと怖いし。  
まあおいてく氣もないので声をかける。

「唔、こぐれー」

「だいたい功は中学生から…って、え?ビリーハー。」

「だから、クレープ屋」

「こつの中にそんな話にー?」

ちつとも聞いてなかつたのかよ。

「さつもの聞いてなかつたのか?悟のおいじりでクレープ食べるつて  
話

「聞いてもなにして承もしてないのに決定してんかよー!。」

悟は正当な抗議をしてくるが、とりあえず無視を決め込む。

「行くか」

「無視!?なんか今日冷たくないー!?」

「うか?いつもこんな感じだと思つたけど…  
しかしそくよく考えたらなんか可哀そうになつてきた。」

だつて俺からだけじゃなく、大抵の人は悟には似たような対応をするんだぜ？」

もしかしたらこいつは結構寂しい思いをしてるのかもしれないな…。俺は携帯を一回取り出し、少し操作して時間を確認し机に置いた。

「（めんな。今日からは俺だけは優しく接してやるから。）そうだな、まずは一緒に登校するか？」

「急に何で！？」

唐突に言われた内容に悟は驚嘆していた。恵もなにがなんだかわからぬよつた顔をしている。

「功くん、なんで悟なんかに優しくするの？」

恵は相当地じごとくを言つてゐるが、今はそんなことはどうでもいい。

「（こつはきつと優しさに飢えてると思つんだ）

「優しさ？」

恵は頭に？マークを浮かべてる。

しかし、俺が一瞬だけ目線を置いた携帯に移すと恵は「ふつ」と笑い、頷いた。

「俺らは悟に対して自然に冷たい態度を取つたりしてることに気づいたんだ。しかしこれからもそれが続くと語が耐えられるかどうかわからないじゃないか」

「え？ いや僕は別に……」

「もういいんだよ、悟」

俺は朗らかに笑いかける。

すると恵も俺に合わせて優しい口調で話しかける。

「そつか、そうだね。今までごめんね？ これからはもう一回じつたり  
冷たい態度とか取らないからね？」

「俺もだ。今まで氣づけなく『ごめんな』ってみんなも言つてお  
くからや」

俺と恵は今きつと爽やかな笑顔を悟に向かっているだろう。

「い、いや遠慮しておくれ。僕は今まで通りでも大丈夫だからさ」

拒む悟を恵と二人で置み掛ける。

「お前が心配なんだ、悟」

「もうだよっ今日からまもつ何も心配しないでね」

「だから……」「

悟が大声で何か言おうとしている。  
やつとか、と思い恵を見ると、すでにちよつと笑っていた。

「僕は優しくされたいわけじゃないから……むしろ功からは優し  
くされるより冷たくされる方が嬉しいよ……」

悟の思いは教室中に響いた。

「さうと今こつは自分が言つたことをちゃんと理解していないだろう。

俺は携帯を手に取り、操作しながら話題で言つた。

「わかったのか…。全然気が付けなくてごめんな?」

「わかってくれればそれで」

いいんだ、とおそれいく悟がそう続けようとしたりで、ペッヒー  
う無機質な機械音が聞こえた。

俺の携帯から。

そして数秒後に先ほどの再現がなされた。

『むしろ功からは優しくされるより冷たくされる方が嬉しいよ…』

恐ろしげくらいの静寂が教室を覆つた。

……。

「知らなかつたよ。お前、ホントに だつたんだな」

「今まで功くんに苛められて喜んでたんだね~」  
「あ……」

軽蔑の視線をダブルで浴びせる。

「違うー今は違うからー。」

「…………」

「…………」

「そんな田で見ないでくれー。」

「興奮するのか?」

「しないよーって伊藤も本気で引かないでよー。」

「だつてえ…。MでB」って…

「勝手にJB」追加しないでよー。」

「恵、いじめても喜ばすだナだぞ」

「わーここよー帰るー今口は帰るからー。」

やつ言いてホントに帰るつとする悟。  
さすがにちよつとやつすきたかな?

「悟ーちよつと待てー。」

「……」

語は無言で振り返る。

やはりやつすぎたのか、若干涙に涙が浮かんでいる。

俺はそんな話はして言つた。

「悪い。帰るならクレープ代だけ置いてってくれないか？」

たつぱり三秒後。

「むづやだあああああ！」

悟は猛ダッシュで帰つて行つた。

「さて、クレープ食いにいくかー」

「功くん、鬼だねえ」

そんな恵の弦を背に受けつつ、教室を出るのだった。

## 「トイレ」（前書き）

閲覧ありがとうございます。

ショーストーリーは何も考えずに書けるので投稿頻度は高くなっています。

ただ内容はびづでもこことしか書いてないです。

「トライ

悟「どうしてたの？」

功「ちよつとな」

悟「トイレでしょ」

功「なんで知ってる？ストーカーか？」

悟「なんで真っ先にその疑いを持つかな！？」

功「いやだつて、なあ？」

悟「その「しようがないじやん？」みたいな顔やめろー。シヤツが  
出てたからわかっただけだよ！」

功「あーホントだ。気付かなかつたわ」

悟「しまわないと怒られるよ」

功「そうだな。ところでなんでうちの学園つてウォシュレットがあ  
るといふとなこといふがあるんだ？」

悟「確かに一階のトイレにはほとんどないね」

功「職員室前のトイレはあるよな。あれは羨ましい」

悟「僕はウォシュレット使わないから別にいいかな」

功「なんで使わないんだよ！？」

悟「なんで怒ってるかわからないけど、あれってくすぐったいから好きじゃないんだよね」

功一いやむしろ気持ちいいだろ」

悟「いやいやお尻に水を直接かけられて気持いいとか考えられないよ」

功「そうやって改めて言われると変態っぽいけどな、あれはやっぱ  
り気持ちいいよ」

悟 「見解の相違があるみたいだね？」

功一俺は譲れない。  
お尻がきれいになつて気持ちいいなんて一石二鳥だろ！」

あれば気持ち良くないね！くすぐったくて我慢できないよ！」

惠「」

功・恵！いいところにいた！ちょっと聞きたいことが

恵「男の子一人で…お、お尻が気持ちいいとか我慢できなーいとか…やつぱつやつという関係なの？」

「おれのがうまい。」

功「どもるなー信憑性が薄まるだろーあと恵やつぱりってなんだよ  
!?

「トマホーク」(後書き)

自分でも何書こうんだろ? うと迷っています。

「**御詫び**」（禮儀用）

閲覧ありがとうござります。

功「すい」と話してもいいか?」

恵「いいよー」

悟「いいけど、なんか漠然としてるね?」

功「聞けばわかる」

悟「ならいいけど。で、どんな話なの?」

功「ああ。これは前に元に電話がかかってきたときの「ひとなんだ  
が」

以下回想（電話相手はA表記）

功「もしもし大藤ですけど」

A「いらっしゃい〇〇会社のAと申します。お父様かお母様はいらっしゃ  
いますでしょうか?」

功「すみません。どちらもいないので自分が用件を伝えておきま  
しょうか?」

A「ありがとうございます。それではメモなどを用意していただい  
てもいいでしょうか?」

功「わかりました。ちょっと待つてください。」

A「はい」

功「メモは～つと。あつたあつた。もしもし？」

A「……」

功「あれ？もしもし？ん？電話越しに何か聞こえるな」

A「……だから私じゃないんですつてーそれと今電話中なんですよ  
つと待つてくださいー！」

?「……お前以外に誰がいるんだ！だいたい上司との話途中に電話  
なんかしてるなー！」

A「……お客様への電話なんですから待つてくださいーーー」

?「……ちょっと電話かせーーー！」

A「……つあちゅうどーーー！」

?「申し訳ありません。今忙しいので電話切らせていただきますーーー」

功「え？あの…今そちらから電話かかってきたんですが用件だけでもーーー」

ガチャッ。ツーッーツーッー…

美香「あれ？おにーちゃん子機握つて何してんのー？」

功「いや、何もできなかつたんだよ…」

美香「へ？」

功「気にするな。それより何か用か？」

美香「うんー。今日もお兄ちゃんとお風呂入りついで…」

功「いつも一緒に入つてるみたいに言つても駄目だからな？」

美香「ちえー。じゃあ早くキスして？」

功「どうこう」とー？じゃあの意味が全くわからない…」

美香「兄は妹にキスしなきゃいけないんだよー！」

功「そんな決まりは絶対ない！全く、「冗談もほじほじ」しろよ？」

美香「はーい。まあ、私たちいつも寝てる間にキスしてるもんね？」

功「それは夢でつてことか？それとも俺が寝てる間にキスしてるとか！？つてか冗談だよなー？」

美香「キスしてくれたら教えるー！」

功「本末転倒じゃねえか！」

以上回想終了

功「つてことがあってな」

恵「たしかにすうじねー」

悟「うん。そんなことがあつたんだ…」

功「さすがにびっくりしたよ」

恵「私もー。まさかねえー」

悟「ああ、まさかなあ…」

恵&悟「功<sup>くわ</sup>がそんなにシスコンだつたなんて…」

功「そつちー? 電話の話がメインなんだけどーしかもシスコンじゃないしー。」

恵「いやあ電話の話も驚くけどさ、仲良いのは知つてたけど兄妹ですうじことしてるんだなーと思つてさー」

悟「インパクトが強すぎて電話の話が大したことじゃなく思えるな」

功「そんなにか? 美香がいつもあんな感じってことは知つてるだろ?  
?」

恵「キスまで進んでるってことは知らなかつたなー」

功「それは美香の冗談だつて！…………多分」

悟「うちの妹じや 天地がひっくりかえつてもあり得ないよ。ただで  
さえ会話があんまりないのに」

功「それはお前が奈央ちゃんに嫌われているだけだ！」

悟「うう。そんな直接言わなくて…」

惠「黒川が奈央ちゃんに嫌われてるのは周知の事実でしょー？」

悟「ひどこや…」

惠「功くんもシステムのはわかるけどもう少し節度を持つて生活  
しなきゃ！」

功「違ううつてんだろーどう考へてもおかしいのは美香だうー。  
？」

惠「けど時々断りきれなくて一緒に寝てるんでしょー？」

功「それは…ってなんで知つてんだよー？」

惠「美香ちゃんが言つてたよー」

功「あいつが俺のシステム疑惑の原因か！」

惠「疑惑じゃなくて事実でしょー」

悟「妹に好かれてる分他人から嫌われてよー！」

功「妬むなー嫌に決まつてんだろー！」

恵「結論ー功はパソコン、黒川は妹に嫌われている兄略して嫌兄ー！」

功&悟「勝手にしめるなー！」

## 「電話」（後書き）

電話の話は作者の体験談だつたりします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1856ba/>

---

笑い日和。

2012年1月5日18時52分発行